

小城のホタルを再び！

「私が子どもの頃、夜道を歩けば服にくっつくほど、たくさんホタルが飛んでいました。しかし、昭和30年代頃から住環境の変化や農業の発達などの影響でホタルが減ってききました」と東島さんは語る。

「このままではいけない、昔の情景を取り戻そう」と、昭和59年に故・江里口巖さんを中心とした「小城源氏ボタル保存会」が誕生した。

保存会の活動の方針は、ホタルの保護。ホタルは1匹当たり800〜1,000個の卵を産むが、厳しい自然の中で成虫になるのは1割強。そこで、保存会では成虫となったホタルを集め、産んだ卵を孵化まで見

届けて、幼虫になれば祇園川に放流している。

また、活動には岩松小学校の子どもたちも協力しており、年2回の祇園川の清掃活動「クリーン作戦」や幼虫を祇園川へ戻す卒業放流などを行っている。こうした活動を通して、子どもたちの郷土愛を育むきっかけにもなっている。

ホタルの光を楽しむために

ホタルの寿命は1年間と短く、とりわけ光り輝くのは求愛活動の1週間程度とはかない。

ホタルが飛ぶ期間、保護のため保存会を中心に商工会青年部などの有志で、毎晩、パトロールを行っている。

。以前はホタルが珍しく、持ち帰ろうとする人が多いのが悩みだった。そこで、あえてホタルをビニール袋に入れ、見たり、触ったり、五感で感じられるようにした。また、短い命だということを話すと捕まえようとすると人はいなくなったそうだ。そうして、保存会の活動が実り、今では数多くのホタルが乱舞する幻想的な光景が戻ってきた。

ホタルの好む気候

- ・曇った日で、風がなく、蒸し暑い日の夜。(人間には不快な気候がホタルがよく飛ぶ気候です)
- ※少しくらいの雨でも大丈夫です。しかし、風が吹く肌寒い夜は活動がにぶくなります。

ホタルの見所

- ・風が来ない橋の付近や高速の高架下や地形が風を防ぐような木が茂った場所など。
- ・祇園川沿いの県道290号線であれば車に乗っていても間近に見ることができます。
- ※その日の状況はハッピーを来た保存会のメンバーやガードマンの方にお尋ねください。

第14回

I ogi

～ アイ ラブ おぎ ～



小城源氏ボタル保存会

ひがしじま つよし
東島 毅さん

- プロフィール
昭和59年「小城源氏ボタル保存会」が発足。現在15名の会員で活動を行っている。

●ギャラリー



▲ 夜空を幻想的に舞うホタルたち。



▲ 岩松小学校の児童によるホタルの幼虫の放流。